春宵淺語

與謝野晶子原稿

特別
文庫14
A170

53-1715

別貫
五号
一段
（奇数頁
コリリム

よみ
本冊2

春宵徳

の

五孫野和

老子とか列子とかを讀んで見ると、文部の古文はすべて文章が短くて、語の無い所と云ふ感がします。併し實際の會話は、そのやうに簡單では無かつたでせう。老子や列子が禪家の公案のやうあいまいなつきづばう言葉で人と應對したとは想はれません。孔子に、しても、孟子にしても、道說や教訓の語錄が多いのですから、その實際の語句は相手

早稲田大学図書館

を詩壇とする必要のために、周到反覆する必要があったらうと想ひます。そこから韻律文章で記録すべきものは、弟子の文章若干加思ひ切り音韻を強調して、一語も動かすことの出来ない為めに、考へ抜いた末、感情の玉髓ばかりを抜き出した彫刻的の表現を取つて、そこに不朽の録像として蓄せたその生気を傳へ、そこに思ひ切つて、思ひ切つて、

○

詩は簡潔なるが為めに、

淵

者の魂の震ひ迫つて呼吸を締めに反射することが出来ることのみで無く、詩歌と云はれる気が、しきりの初めから終りまで感激の無い、疑紛の無い、憂鬱の無い、だうたがしきりの散文の模倣には忘れ、しきりの、口ずかしかぶつの建築を仰ぎ見た心持で響絃の出来る詩歌を、あれは此国の言葉で憂みたいと思ひます。今の詩歌は冗辞ばかりの多繁ばかりの、冗長ばかりの、冗長ばかりの。詩人は多い。

「淵」の持軍で無ければならぬ。

如何なる宮廷の淫歌に、花鳥風月の雰囲
しを持つた淫歌に、

○

歌を作るのは何を強んだらよいかと云ふ
ことを作るのは人如何に閉かれて、私は困つてしま
ふ。

何ぞ淫みやすい答をせねばならぬ
ものあつけない答をせねばならぬ
のあるべきやうに、

歌を作るものにとつて
は、

淫みやすい、

世間と人情とが結びたがつてゐる。

淫歌を作るものは、

人が水と合ふやうにして、手を合ふ

次第にいろいろの事情を強みすした。事情が
うしてもかう淫山に強ちそうは出来ません
でしたが、出来るだけ注釈本で無いものの本
を愛読し淫みつ通しました。

唯だ其れだけです。

私の淫書は迷惑に私の歌とは少し関係が
ありません。

私の歌は、或年代と
ともつて、私の内に歌で
歌はずにはゐられぬ感動が起りそうしたので、そ
れをでうしても歌はねばならぬ用に成つて
歌を作つ変しました。唯だ其れだけです。

私の歌

は直接に私の漢書とはかしら関係がありませんっ

恐らくこの態度は間違つてゐないであらうと思ひます。行方の中に漢書をしたしみから創作力の伸びやうふ人のあるのは、創作の考方にとふ想ひをつけて書物を漢書読みさせずにいてはあらうまいかのようんか態度で他人の作物を漢書の第一義である人間の魂と魂とが融合ふことを意味して、作家として自己を意識が先に立ち、他人の作物の技巧

的な細部はのりに目を遣ることにあります。心うさうなれば自分が革新して、他人の本気に堅倒されて仕舞ひます。

の

日本の詩歌は漢詩の影響から出来あがつたもので、平安朝から鎌倉室町時代へかけての歌論がその通例です。歌論の盛んであつた時は却て好い作物が出て居ない時代であるやうに見受けます。歌論と作物との益々乖離して行くのは吾輩の信ずる大

限定の二人であるが、それにしても極く人為的がら歌論の方が秀れて居て、二人の歌はその論を裏書きしてゐる感がありさう。

人麿と、大野山、和泉式部、西行と言ふやうな秀れた作家は歌論をしてゐない。歌は論ずるものでなく、作家の世界だと思ふから。

○

に正岡子規氏とその門に属する方限定の人達の全集を読み、今までに作家本位網博士が編集された歌論を読んでゐ、私は言葉が天位の歌人を嬉しく思ひながら、併し他の生れた事情でも言葉でも、絶りに歌人たる自覚に徹して居ることが今の私は一番の私は二流の歌に甲乙の名称の特色のない人間性の発露として面白く思ひながら、その人間性が社会人類と交渉した時代の変動の歌人と同じ独立傳統熱の中に終始して居ることを知らない。言葉が重要視されなくなる日は

まうかうたんと云ふよりはそれどころか、吉雄の全幅に
わたって目を捻ふ傷痕が、脚を顔面だと思ひます。

一の

蓮月尼と云ふ東尼とはほんとうの姉妹で近代
の歌人であり、吉雄の明治の時代の中にあって陰陽の
色彩を取らねばならぬ境遇に置かれてゐたが、
両方ともにして人間を愛する人でありやうん
でしたの蓮月も信仰を砕くべきから望東尼同じ志
士的態度を解さなかったやうな。

矢嶋博士、岡吉郎博士、国吉郎博士、吉雄博士、安倍博士、

6

子と云ふ学者は明治たての女流作家鈴木に説教
の独い高貴に傷痕して、その生活に待がありま
すれんの此事が望東や蓮月を云く深くし、彼
の女流を性く書くしまうの拙井弦麿子さんも
時の世界と交渉する所があつたのだらうと、そ
の死が一せの歴者をも感動させました。
今の新聞の基数婦人、女流評論家、婦人
記者と云ふ人達に新しても、私は宗のに諸の
修行者の新けては佐藤のと云ふことを学ぶ
ものの

の

仏井経験さんの一死は就て学上の感想から、に
仏さんは、ただ中で、
なんは方角毎日の夢見さん、学
術的文学の学者博士と田中王堂氏、社会の有
力の主張の主張の書かれたものに基づいて
中に過ぎなかりしが、面白く経験さんの人生
観の変化を思
ひ、
私がかう家しらのは、経験さんに出す
の Ice 神があまりに多く経験さんの紙を
の経験さんに対する感情
そして作られた人生
観の変化を思ひ出すもしたらうと考へます。

る私の距離が、前記の矢崎氏の経験さんに
対する距離と似てゐる為めに、私しさんの
の距離と云ふものが、一人一人ちがつて居
るものであり、どの人の感想も各自の距
離に由つて正しく書かれたもので、誤れる
の見たる経験よと云ふ範囲内はとかく問題つ
て居るものでやう。

かうなつて、経験さん自身が知つて居
た経験さんと云ふものは永久に解ふ事りて、
萬人の目に興味ある経験さんと云ふものの
経験

のみが強調されるようになるのである。経済的には個人の主観上の人格をもつものである。

さうして、どんな経済学者に指導された人は極々少数で、社会の多数人は皆社会の中に、実に多量の生産的組織にあつて経済学者は眼をつけてゐるつもりであるが、実際の経済心理が多数で極めて社会的に弾力的に一般に行はれて客観的の評価と云つて行くのでは無いでせうか。

の理論が多くの理論を作らずに未だ博士あるの

うで無ければ新聞の三面記事を作り、記傳の多い材料の上に一般的な評価を作つて仕舞ふやうのものである。歴史には後者の商例が多いと思ひます。実際と云ふものは可なりあやふやものでいつ迄経過するか。

人の人を観察して、その人の見る、直載にその人の変りをしる歴史を立案とする。

つまり史学が歴史学の一種として、個人の主観的価値をもつて仕

行

無言の言行

人は同じ一人の人からでも、常に是認され
ようと言行が行し得られる場の心のでない
のでもあり、そして個性のもつ加つて萬人から、
或一時の、或一つの言行に對して、一様に
是認せらるる事は容易に望まれない事で
は無いであらうが、
人が他人を是認すると言ふのは、一つの言
葉を通じて吹はされた個性の一面だけに對し

説

恥

てゐその其特はその一
一つの言行と個性の全體
の象徴として見てゐるやうであるけれど、次の
新しい言行に就ても、前と同じ評價を與へる
のとふことは安全はされない。
多數の人が一人の人の言行に對して、一様
に同感すると言ふ場合があるその傾し抑揚
して行くといふその同感は、全く個性の特色を
強ひて、空る個性の反響である。高尚な人格の
事に對して同感したことに賛成したりする。
尊敬が天才を一様に崇拝すると言ふやうな

異

塩を以て、その心理を究めると、たゞ、その天才のたゞたる特性以外の、すべての、すべてに活らぬ外、面技巧の點を要件とせざるべからざるの形

象に[illegible]がれると云ふことは難有くないことで

と思ふやうな。

の

偶像を崇るに、あらずして、偶像に似る偶像であるかが、新しい内容に基づく新しい形式に

りやうな。

もしあの、[illegible]と云ふ館主前の良人の[illegible]がある

ちやうが、新しい内容に基づく新しい形式の外に立

はあるべからざるやうな

傾向

しば結婚に就いて、四人の意思を尊重する成立

すべき、恋愛の偶式とは、実に四の事をし

て、先づ第一に結婚を行ふべきである。完

ひやうに、個人に信じ、同に信じ、[illegible]の結婚は、結婚の成立を表示する[illegible]の形式として、信仰の命

ずる通りに結婚を[illegible]ゆを十るのに適し、[illegible]

そやうに結婚を[illegible]ものは忘恩と云ふに止

まる。結婚に対する夫婦相互の責任を軽視

する夫婦の自己の行主義を、結婚を、その

第一章は主として自然を除外したる小文化的夫婦の

離婚は結婚の手段を定んずるに、ちょうど

離婚に就てもその責任を現代人らしく立派に

定んりて、既に夫婦としての愛の結合がつい

いろと其れを保持しようとしても何れの一方から離婚を申出

ば、その結婚の内容の堪忍に保ち結婚の形式

の際面白くも面白に法律すれば、ちょうどそんな

事実上の夫婦生活からの離婚の形式

を行使的にいつまでもいつまでもこうあるべきものと

酷い嫌悪の感情から結婚上の離婚を快諾しな

かつたり、また紅葉の如はくとか信用とか

言ふ外面的なことに意識する昔時を絶縁の利

の位から、妖怪を別居をして離婚を申出

いと言ふのは、新しい男女道徳の上から考へて

て手段を知らない道徳の行為を思ひ切って

日本の新知識は、法律は弱者たる女子を保

護せよと言ふ注意の思慮を失入見的に固執し

女子の抗辯する離婚新法には、唯一言の如理

故

中事情を調査して、男子の中立てを部下
にして言ふ聲望があります。之がために實際
は別居して居ながら戸籍上に於て離婚の形式
を完成する事、、、

此が去年の冬
初めて浪華新聞を三山書店
より買ひ、社に、ゆき
のこれはや良
く、特に、人の
為に、
ある所に一部の者に
集りて
居るとの
事なり
此
の時
の
場面
は一
部に
すぎず
此
に
此
の
時
の
場
面
は
一
部
に
すぎ

我が国体をそこなはず人間を法之んで病毒を防ぎ物的に傷害さるる前のやうな感にがしまする。あの
ものたちはやはりはがいいう病毒まみれるるか、
そうしてもそうしてもそうしてもそうしてもそうして。
そのもちろん恐しいのは家族に於ける家族の結核
ぬ中学、女学校に到るまで、教室に防毒の設備
がありそれで、学校は何の衛生的設備も用意せずして
で、学校は何の衛生的設備も用意せずして
あいつの赤水で生徒に手を洗はせる工夫も無
学も無ければ、生徒に手を洗はせる工夫も無
ければ、生徒に手を洗はせる工夫も無
徒に学校をそなる工夫も無

十ノ二十 鈴蘭医山田製

いのでそれっきりになる。
からしてもしても、父兄のひとりとして
文部省はのうのうと小学校の衛生設備を全く怠慢
でそれっきり。
それは和歌園を始めとする吉原の
現在の日本の貧乏は理想に遠い、貧に
合やうのでそれ一に防寒の設備が悪く、
悪
お俺が自宅の屋内からも一層衛生的に安全
な新鮮に空気のよい、四季を出一日か
ら新鮮な空気をそなえていそれ

の

新家族制度に於ける文学者の姿勢から所に
中心として、政治の方法に於ける無言の抵抗が、
陸軍的、軍国主義的の弾圧から、自由主義的
傾向的な表現に移り、一面に於て美的である
と共に、一面に於て強制的に微笑せられてを
力めて行くものの之はあがせいられての
あれ、自分の方法に新たな方法の如き方から
主張して行く所と一致して行くものの強し日本
の中家庭に依頼して陸軍式強制を軍国主義の

十ノ二十　静岡県山田殿

設

1/7

見地から陸軍刈し、如何朝の四月は寒い新宅で
陳ずる想食の禁忌を食べ、何等の衛生的設備
も無い中で新宅の移転を強せられ、さうして、
いろいろの病気に感染して、その病毒を更に
家族に輸入し、即い第妹をも病気にして仕舞
ひ、その之がいろいろの後遺症を新しいだけの
苦痛と経済上の失敗とを加へて行くか知れ
ません。

○

西山哲治氏が雑誌「婦人公論」の無い
主婦に

無子殺を課せよと言はれた事には如何に然成
しうるか今日同じ事情の下に置かれた子供の有る
家族と無い家族とでは精神的、経済的両方の
負担に非常の懸隔がありますから子供が五人
以上ある家族で、どうやらこうやら暮して行ける人達の割合
は、去年迄は、子供が三人以下の家族で
つて間接に保護する事は、ぶを持たない者が
かけ負担して然るべき社会的義務だと思ひます。

ある事は好ましいことですが、この無子殺にゆつて、
毎年一千萬圓の財源を作ることが出来たら少
くも全國の小学校の教師を始め諸俸給生活者
とが共に喜ぶべきことであらうと思ひます。
それ故、子供の有る階級の人々に対する無子殺
の方法は、間接に課税する方法を採るとして國
家に負担させる方法にしたらよいと思ひます。
國の収入に對して所得税を課することにしし
て欲しいと思ひます。
以上の如くに一億圓に近い金額を課す
ることにゆつて、

は軍備の制限さへすれば何でも無く作所りさへすれば現に於てはこれから所得税を陸動的にそれまでの倍額を徴収せんとする政策の文字に依る収入と言へばなるほど結構なやうなれども全く少しも増加せずして依然として今日の如きものであつて此点を得ず結局と結局に於ては依然として今日の如き状態に陥るやうなれば収入の総額は如何を見ずして結局前よりも増えて居るやうなれば一応は成功したと言へるやうなれども一方に於ては増税は

世界に於ける諸の子供がつぎつぎに罹病せば、その位置を奪はれたる者に対する動揺を惹起する動揺は必ずしも一定の範囲を出でざるものなるべし。個人の最大限度のを使ひ尽すまで定を無つてもい動揺が民主主義の動揺と言へるであらうか。

而して民は何に惹起と言へるものを導へられて使ひ尽すまで結果しようとすれば人造的な品級で其の如き貧富階級の男女に結婚しようと為すに至るべしはそれは人造的の

まず、の弾は政友会の経済組織では軍に家族を
伝えるその夜隠れ国に見えて居ります。結婚を
結婚するものは警戒国ふ結婚するものが建設しなくいか
らでその中つと一人のはて駐するに過ぎるだけ
の職業に有り附くあの有り所がないのの家族ふ
い経済をしの節者に、結婚しないからと言つ
て弾圧するのは残酷です。

の

多数の者病をしようから、今度一月頃の雑誌を
引き出しして見ようと思ふ。

18

分陰で、まだ例の女性侵害をかしその男
を進めること無しに、感情的に同乗して居
られた答辞に對して女史の下された批評ですが、
之は女史に直上した戸が好いと思ふからで
篇に同じました。私の答辞のあは正刊の問題
雑草に収めました。が感情的でありか合理的で
ありませんが、女
史の答辞に對して、さう平然と陰
なと思ひます。

はい私の反駁に對して、なぜ一々答へられないのでせうか。答へられぬならば義務がある筈のたゞなあがい、私のあの答辯のゆに成つル書かれて居らぬ、その云ヒル如ノ・ブルノオは「責任は当事者の所有で無い、僕僕の所有で無い。唯だえを愛する者の所有であると云ひ、別るは自信に果敢ならも、理を極るに果なるべけんやと云ひ、たゞ女史の責任の答が僕は「私の答は」それ責任の前に飛みて他を

例へば、女史が私に對して、私が女性僕蔑に反駁するときは「お僕を自己の所有物視して居るかゞだと云ふ断言を敢てせられたのに對し、私が「お僕は自身のものである云々と云つて居らとお答へしたに事に就て、女史は全く沈默まれる居りて。平塚さん程の敏慧なる婦人がお前のお僕はお前の私有物だの人格の無い弱虫だと云ふのに等しい断言をするのには何か確なる理由の無くてはならぬ。唯だ感情的にての断言

をまもるのであるが、あまりは私と云ふ一人格者と、私意を捨てる性としてまもる人格者と、私意を捨てる性とに對立して、修羅しい障害をかへうむる事になるのの平塚さんはどうしてその愛と禮儀との無い粗野な言葉を使用して

云ふのであるのであるかのやうな云ふ場合、その相手から如何障害を加へて居らるるのか、一言の陳述

ら合理的な反論とかけるから、一言の陳述

一体の意味と云ふものは、修理的の感覺が動いて居らるるのか、事理の愛が

修養上のか、私は人道主義の立場から、美的感性から、美的感性のみを洲主義に不完全に思ひます。

先例へば、四の經濟的生活の保障を國防の文藝に代かうとする平塚さんの保障に對して、私は代用人から食物及住居を奪ひ、すべての人間を國民とは認めず、單に國家補助の人格主義に據り、四がそのつて云ふカンドを認めて居らるに過ぎ、四としての婦人の家の問題を解決する修養は經濟上の問題とする性質

のみで言いと云ふ江上博士の説に接して
反対した點にも、平塚さんは一言も辯明
さなかったのであります。是は辯明がいやな
ばかりでなく、平塚さんの言はんとする意味の母性保護
は全く成立しないのでありまして、平塚さんが感
情的に論理を進めるあまり、思ひそのもの
を理解せず、自己の心に對して、何と
かして他を一論破しようとされねばならぬ筆であります。
しかるに、平塚さんは、私の反駁を全く素直
に

21

けて心を使をもみ出つ言ふる。母の仕事は、経
済的償を強めよと言ふことを主張しようと
思ひ、家庭的生活を営む婦人の立場に立って
を手へるこのでせうか。母性保護の意味か
ら、國庫が母のを保護を保障する、まもしく言へば
ば使が母の手を必要とする妊婦、國庫が
母の仕事に對して報酬を支拂ふと云ふ意味に
於る母性保護の意味に十分の賛意を表する云

ことは、ならびてなすべき。

この「国家が母のセを保護する」と云う事を、平塚さんは母の経済的独立を確保する唯一の最良手段である、と考へられるのですが、

之が実現の可能性を持たない空論であることは、一月號の「新婦人」で一條忠衛氏が理知的に強調されました。女史の強調は一條氏にゆづって全く賛成したと云って宜しい。

右

一條氏の右の論旨は「母元は母としての女子のセに

事業の発達に応じて」と限定するのでいろいろの有益な職務が母へうばわれて行くべきであり、母性保護論者である平塚女史は母元、一般の婦人達にも(母)一層奮起をお勧めして置きました。一條氏は、其中で、事業の家庭的要素が経済的優位として取引される性質のものであるから、母性保護論者は紀論でなければならない。母に母たる特権を与へようとする高尚な考を持とうとする思想を事業と事業を結合し、「婦人が生活費を得ようとする高尚な考を持とうとする」のは、国家に対する義務を果たすことである。

であること

おとのきまめ

文部省が社稷すると云ふ事に国家が社稷すると云ふ事とは、四とした事は見へるが、国家は第二の良心と見なすやうに見えるが、国家の立場のやうにまうて、依然として、その生活を国家の保護に仰ぐと云ふ事に、過ぎないとすれば、国家的な立場を利用するかぎり、平塚さんは一体女に無理をさせるのが、当然だと云ふ、国家的に決定されて、はじめて国家の線は何うするのと思ふと云ふて、強制に動員をするから、平塚さんは一体女に無理をさせるのが、当然だと云ふ。

1/2

東京三河屋製 ナ〜ハ